

環境保全市民団体との交流会について

平成 25 年度のパートナー企画部会プロジェクト企画として、霞ヶ浦流域の環境保全市民活動団体との交流会を 11 月 2 日（土）に実施しました。

交流会は、パートナー及びセンター職員も参加して、認定 NPO 法人でもある「宍塚の自然と歴史の会」のご協力を得て、今回初めて活動現場での体験を通じた交流となりました。このプロジェクト企画は、パートナーが霞ヶ浦流域で活動している多くの市民団体と定期的な交流を通して、相互のコミュニケーションを図り、その中で知識やスキルを吸収し、環境保全に対し視野を広げ、パートナー活動にフィードバックすることを目的に、パートナーの自主活動として数年前から企画、実施してきました。

ここ宍塚は、センターから車で 15 分程度の距離にあり、「宍塚大池」を囲むように雑木林や草原、田んぼや畑、小川や湿地などさまざまな地形の 100ha ほどの「里山」が広がり、多くの生き物を育む豊かな自然環境となっています。

テレビ等の放映で観ていましたが、実際に現場に行くと昔ながらの自然が現存していて、あらためて驚きました。その昔、私は悪ガキどもと宍塚大池に何回か遊びに行きましたが、薄暗く、じめじめして、雑草が生い茂り、道なき道をたどりながらの危なっかしい、手つかずの荒れた場所との印象がありました。

その様な場所を、周辺住民との対話も含め、種々の課題に対し膨大な時間と労力をかけ、根気よく強い意志力、組織力で地道に克服しながらの活動に感動しました。

さて、今回の体験交流は、湿地帯に植生する外来種のセイタカアワダチソウの除去作業です。

湿地帯の広がる山裾の幅 1m 程の山道を数分歩き、現場に到着し除去作業を開始しました。セイタカアワダチソウは黄色の花を咲かせているので、一目で判別出来ます。除去のポイントは繁殖を抑えるために根から抜く必要があります。長靴着用が理解できました。長靴は湿地の中に足首まで入ります。マムシやハチへの注意を受けながら、総勢 14 名で約 40 分の除去作業を行いました。この地は、今後あらたな目的で活用されるそうですが、結果の見える活動は、流す汗も心地よいものでした。

作業を終了し、大池の傍で案内して頂いた森本氏との質疑応答を行いました。やはり会員の高齢化の課題や行政による総合計画の影響等、活動自体とは別の問題もあり懸念しておりました。我々参加者が総じて感じたことは、広範囲な里山保全活動に対しての努力と熱意に対する敬意と我々の環境保全への新たな思いが再確認出来たことです。

今回、快くご協力頂いた「宍塚の自然と歴史の会」の皆様及び対応頂いた森本氏に感謝致します。
(企画部会：尾形)



「私の細道」(その8)

日光

曾良の随行日記には、芭蕉と曾良は元禄2年(1689年)陰暦4月1日(陽暦5月19日)の正午に日光に着き、「清水寺」の書を「養源院」に届けたと記載されている。当時、東照宮への参拝者は旅籠に依頼して、手判(拝観許可書)を入手する必要があった。一般には、芭蕉らが養源院に届けた書はこの手判交付の為の紹介状であろうと解釈されている。だが、芭蕉研究者村松友次氏はこの書は別の意味を持つと主張する。

当時、日光東照宮は数年来の群発地震によって損壊し、修復の必要があり、幕府はこれを伊達藩に命じていた。修復費用はやり方によっては、藩の財政を圧迫するもので(尤も、幕府はそれが目的ではあったが)、藩内では不満もあり、再三幕府側と修復の程度に対する交渉がなされていた。その交渉術も微妙で、一步間違うと幕府に付け込まれ、お家取り潰しの糸口にもなりうるものであった。

交渉書簡の日光側の窓口が水戸家の宿坊「養源院」であり、養源院から浅草の「清水寺」を通じて幕府へと送られていた。芭蕉らはそのルートの手紙を持参したことになる。そして、芭蕉らの訪れた日は、幕府と伊達藩の修復案についての折合いが付き、工事に取り掛かり始めた時期であった。事実、この日は、狩野派の絵師らと東照宮側との襖絵の修復についての打ち合わせがあり、芭蕉らは御別所大楽院でしばし待たされたらしい。よってこの書は、表面上は紹介状かもしれないが、それ以上の意味を持っているのではないかというのが村松氏の解釈である。



日光 養源院跡

芭蕉らは重要書類を秘かに養源院に届ける為、この日に日光を訪れたのであり、それは幕府と伊達藩に関連した書類であろうと、芭蕉らは日光に着くや、すぐに東照宮を訪れ、次日には、裏見の滝や含萬ガ淵を見物したものの、早々に黒羽に向け旅立っている。

私は妻と8月29日に東照宮を訪ねた。茨城は残暑厳しい日であったが、東照宮は涼しかった。まず、養源院跡へ向かった。そこは東照宮本殿の北東隅のはずれで、墓碑あるのみの深閑とした冷気ただよう森であった。訪れる人影もなく、土の段差はあるものの、建屋の跡らしき気色はない。少し下ると重厚な建屋があり、美術館となっている、これが旧社務所であり、かつてこの位置に御別所大楽院があった。ここに来ると見物客も散見され、更に、表参道に入ると、社殿に向かう小学生の列や外国人で賑わっていた。陽明門は丁度、元禄ならぬ平成の大修理が始まったばかりで、全面がシートで覆われていた。表参道を少し逸れた場所に、石唐門があり、その側に芭蕉の句碑がある。ここにも人は誰もいない。今や芭蕉は、日光の賑わいの外に居るらしい。

「おくのほそ道」の日光黒髪山の章段で、芭蕉は同行者の曾良を紹介している。曾良は芭蕉の最も信頼厚い弟子の一人であり、この旅の前に、鹿島詣でも同行している。芭蕉の深川在住時から身の周りの世話をし、旅の出立前の準備から路銀の段取りまでをそつなく配慮する有能で便利な弟子であった。

この曾良、実は様々な顔を持つ謎の多い人物である。信濃の生れであるが、父母に死別後、伊勢の親戚に引き取られ、長島藩に仕えて河合惣五郎と称するようになった、その頃より俳諧に親しみ、天和元年(1681)33歳で江戸に出て、幕府神道方である吉川神道の吉川惟足に入門する。その2年後に芭蕉門下となり、深川に居住する。みちのくの旅の前には剃髪し法体となって芭蕉に同行している。芭蕉没後、宝詠6年(1709)には、幕府の九州巡見使随員ともなっているが、翌年、壱岐に62歳で病没している。

この句、黒髪山の章段に曾良の句として掲載されているが、実は曾良を紹介する為の芭蕉の作である。「おくのほそ道」には、芭蕉が自分の句を曾良の作として掲げた句が随所に現れる。黒髪山は日光山主峰の男体山であり、歌枕でもある。この日、旧暦4月1日は夏の衣更えの日であった。芭蕉は、「衣更の二字に力あり」と書いている。衣更とは、単なる夏衣への替えではなく、曾良が僧衣となった決意をも意味すると解釈されている。

(パートナー：小松)

岐阜県 阿木川ダム紀行 「空芯菜による水質浄化実践地見学」

三重県の津市で学会（日本水産学会秋季大会）があった。会場の三重大で養魚場の水浄化に関するポスター発表を行い、その帰途岐阜まで足を延ばし恵那市にある阿木川ダムを訪れた。県立恵那農業高校の空芯菜（クウシンサイ）による水質浄化の実践地があるためである。名古屋から中央本線快速に乗って小一時間もすると、そこはかつて中山道の宿場町・中津川宿の玄関、恵那市である。JR 恵那駅からは交通費節約とウォーキングを兼ねて炎天下のなか歩くこと2時間。つづらおりの坂の上のトンネルを抜けると阿木川ダムの湖畔に到着した。煌めく湖面の遠方に青白いフロートの浮島が目映った。ようやく空芯菜の水上菜園を見ることが出来たのである。

茶店では（五平餅が高かったので）揚げ餅を食べ暫し鋭気を養った。その後国土交通省の管理棟までさらに歩き、管理者の方から栽培作業の様子について話を聞く事ができた。

空芯菜は標準和名を「ヨウサイ」（薺菜）と云い、ヒルガオ科サツマイモ属の中国原産の帰化植物でヒルガオのような花をつける。別名エンサイやアサガオナなどとも呼ばれ、東南アジアではかなりポピュラーな野菜である（空芯菜の名の由来は茎を切ると内部が空洞であることによる）。暑さに強く成長が早いため栄養塩類の収奪が顕著で、水質浄化への利用が検討されている。阿木川ダムでもアオコの発生が目立っていたが、恵那農業高校教諭の森本達雄氏が中心となってこの植物を湖上栽培する試みが行われてきた。この取り組みはマスコミでも報道され、地域活性化と環境意識の向上を図るものと期待されている。近年注目されている植物を使った環境修復手法、いわゆるファイトレメディエーション（ファイトとは「植物」、そしてレメディエーションとは「治療」や「修復」の意）の一つである。ちなみに空芯菜は野菜としてはハウレンソウをも凌駕する高い栄養価を誇る。土浦市や阿見町の産直・スーパーでも販売されている。

帰路は流石に暑さには耐えられずタクシーで恵那駅まで行くことにした。町は秋祭りの最中であり、昔ながらの懐かしい光景を目にすることもできた。

隣の中津川市にはリニア中央新幹線新駅のオープンも決まり、木曾街道の山郷にも新たな風が吹き込み始めそうである。「自然との調和」を考える秋の実りある旅であった（パートナー： 新関）



空芯菜



阿木川ダム

平成25年度パートナー全体研修・交流会開催のご案内

昨年度はパートナー、センター関係者を含めて29名が参加されて大変有意義な全体研修・交流会でした。

午前中は株式会社ウインドパワー・いばらき 小松崎 衛氏による「再生可能エネルギー」の風力発電について講演をしていただき、質問も多数され大変好評でした。

昼食会では講師の方も参加され、気軽に質問に答えていただき又グループを超えて皆さんで歓談しながらの楽しい昼食となりました。午後は各グループの活動報告会が行われ、所属グループ及び他グループの活動内容を纏めて聞くことによりパートナーとしてのスキルアップになったと思います。

今年度もパートナー企画部会主催「パートナー全体研修・交流会」は平成26年2月22日(土) (予定) に開催を予定しています。

「平成25年度 パートナー全体研修・交流会」

- 1) 相崎センター長による講演を予定しています(テーマは未定)。
- 2) 昼食会(今回は豚汁ありません)
- 3) 各グループによる一年間の活動報告会
- 4) その他

各グループのメンバーは日頃活発に活動されていますが、皆さんが一同に集まれる機会はこのパートナー全体研修・交流会しかありません。ぜひこの機会にグループを超えて交流する機会でもあり、多数の参加をお待ちしています。なお、参加申し込み等については別途、センターより連絡されます。

パートナー全体研修・交流会当日はイベント・記録グループによる「いきいきフォト展」が展示交流広場にて開催されます。日頃、各グループの活動している様子を写真で紹介しますのでぜひ見ていただければと思います。

〔展示期間：平成26年2月18日(火) から2月28日(金)〕

(企画部会：栗原)

デジタルカメラ(その10) 今さら聞けないデジカメ用語集(下)

○ 光学ズーム

レンズを物理的に移動させ、視野角を調整して拡大させることをいいます。光学ズームは画質を劣化することなく拡大できます。通常のコンパクトデジカメでは3倍光学ズーム、高級機では10倍光学ズームなどがあります。

○ デジタルズーム

レンズは動かさず、電子的に拡大させることをいいます。計算で拡大処理を行うため、画質が著しく劣化します。「光学3倍、デジタル4倍で合わせて最大12倍」というのは、光学ズームを3倍し、更にデジタルズームで4倍に望遠することにより、12倍のズームが可能という意味になります。

○ 撮像素子

撮像素子はレンズから写る光を受け取り電気信号に変換する部分、デジカメの重要部分の1つです。一般的にはCCD方式、CMOS方式といったものです。CCDとCMOSは方式の違いだけで、撮像素子としての機能はおなじです。

○ トリミング

写真の加工用語の1つで、写真の不要な部分を切ることで、出来上がった写真をきるのではなく、パソコンやプリンターなどの画面上でソフトなどを使い不要部分を切り取る方法が一般的です。

(パートナー：目次)

「パートナー情報誌 香澄」原稿募集

香澄編集部では「香澄」に掲載する原稿を募集しています。内容は問いません。センターでの活動内容や、趣味などなんでも結構です。写真も大歓迎です。原稿はパートナー室のメールボックスに入れていただくか、編集委員に直接お渡しください。多数の皆さんのご投稿をお待ちしております。

(パートナー情報誌 「香澄」編集部)